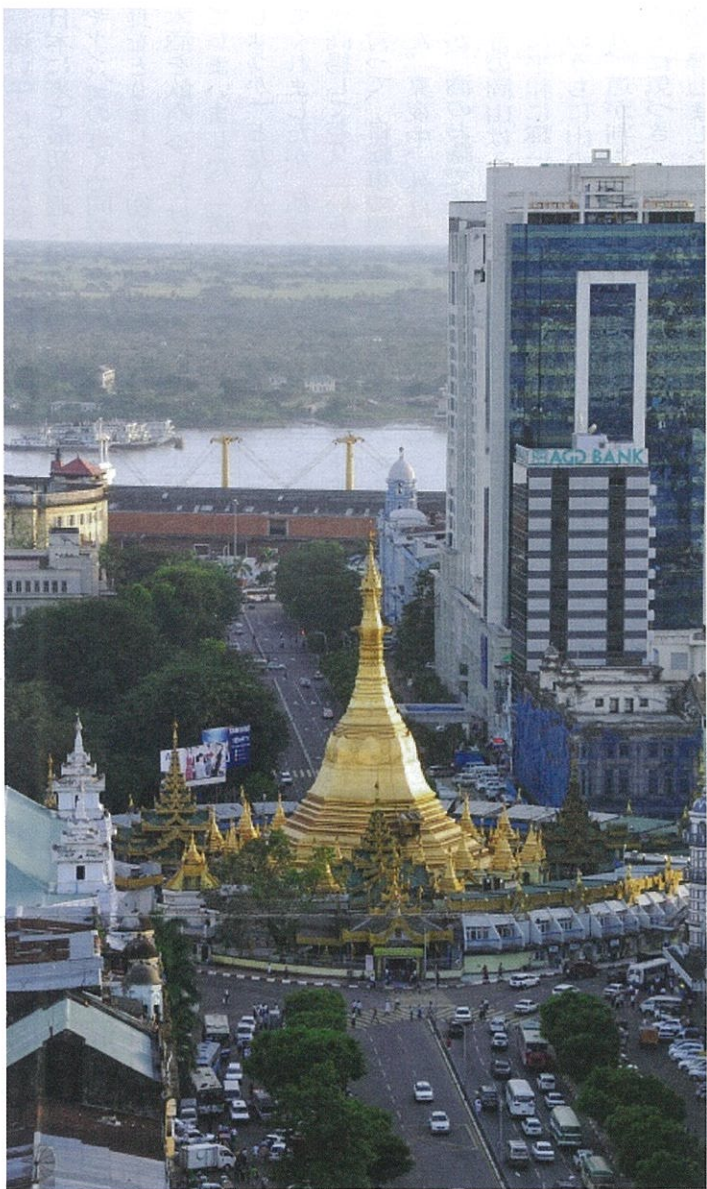




ミンガラバー

認定 NPO 法人
 日本・ミャンマー
 医療人育成支援協会
 〒700-0023
 岡山県岡山市北区駅前町2丁目4番23号
 TEL:086-224-0102
 FAX:086-221-2554
 URL:http://www.mjcp.or.jp



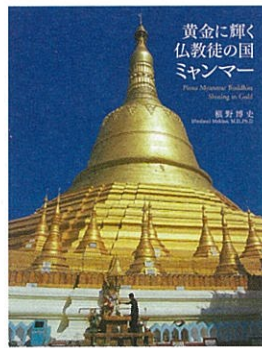
夕日を浴びるスーレー・パゴダ。向こうがヤンゴン川＝ヤンゴン。左は市庁舎、右奥に高層ビルが立つ。

ミャンマーの「今」を撮る 榎野岡大病院長 写真集出版



岡山大学病院長の榎野博史さんが写真集「黄金に輝く仏教徒の国ミャンマー」を出版した。本の紹介と収録写真の中から2点を掲載する。

エッセー添えて約80点



2年前の民政移管をきっかけにしたミャンマーの経済成長と街の急激な変容ぶり。その一方で、どこか昔の日本を思わせる懐かしい光景、そして敬虔な仏教徒の姿。変わるミャンマーと変わらぬミャンマーの「今」をきりとした写真に、説明の文章を添えたフォトエッセーだ。

2012年11月に岡山大学とミャンマー保健省との医学交流協

定10周年の記念式典に参加した際に撮った写真と、09年に研究発表のために訪れた時に写した写真の中から約80点を載せている。最大都市ヤンゴンを中心に、その郊外や古都バグーが撮影場所だ。

写真が趣味の榎野病院院長はこれまでに「後樂園の四季と瀬戸内の光」「オランダ物語」「犬島の埋もれた歴史」など多数の写真集を出している。今回の出版について「この本でミャンマーに興味を持つ人が増え、支援の輪が広がれば」と話す。非売品だが、岡山県立図書館と岡山市立図書館に寄贈済み。



携帯電話を持って語らう僧侶と尼さん＝ヤンゴン

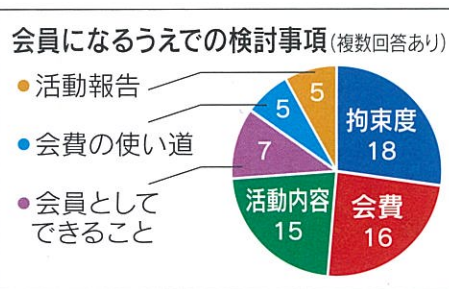
活動の詳細載せ 協会の記録集に

榎野病院長の写真集には、協会の岡田茂理事長、小出典男副理事長、木股敬裕、西崎建築両理事が分担して、ミャンマーでの岡山大学の医療活動についての経緯と実践を紹介、またNPOの立ち上げとこれまでの活動について書いている。共同研究や臨床支援などに詳しく触れ、研修・留学生の二覧や協会員の寄付によつて建設された診療所なども掲載。これらの活動ぶりを伝える写真も数多く載せており、協会にとつてのいわば記録集にもなっている。

「会費もっと安く」 学生会員ふやす提言 岡大医学部の村上さん

協会に学生の参加を。そのためはどうかすればよいから。岡山大学医学部医学科6年の村上拓さんが、学生会員についての提言をまとめた。①協会の認知度の向上 ②学生会員の会費を安くする ③学生同士の交流 の3点の必要性をあげている。

村上さんはミャンマーでの国際医療協力プロジェクトに参加したのがきっかけで、協会理事の木股敬裕教授から学生参加についての調査と提言を頼まれた。友人ら岡大生36人にアンケート調査した。ほとんどが医学部だが、教育学部や法学部などの学生も含まれている。



協会を知っていると答えたのはわずか2人。国際医療を行うNPOがあれば会員になりたいが12人(33%)、国際医療支援活動に興味があるが22人(61%)だった。国際医療に興味を持つ学生が多いのに、NPO会員になりたい学生が少ないのはなぜか。アンケートでは参加を妨げる要因に会費と認知度、さらに学業との両立をあげていた。会費は年1千〜3千円が適当。認知度を上げるためには活動についての講演や報告会を開き、フェイスブックなども活用する。また、協会の名称を変えて覚えやすくし、愛称があればよい、という意見もあった。

村上さんは他のNGOやNPOがどのように学生を集めているか、例えばAMSA(アジア医学生連絡協議会)、IFMSA(国際医学生連盟)などの取り組みも調べた。こうして提言をまとめ、「学生でも参加できる、参加した場合のメリットがある、ということ協会は具体的に示すことが重要」としている。

岡田茂理事長の話
 若い人たちの力は協会にとつても大切です。学生会員制度はすぐにスタートさせ、会費は千円とすること、理事等に提案したい。国際医療支援活動のきっかけとなれば嬉しいことです。これからの提言を沢山受けたいと思います。

岡山大学病院形成外科での3か月にわたる研修を終えて、3月、ミンゾウアウン医師が帰国した。同形成外科や協会へ寄せた礼状には、岡山での様々な体験と印象を綴っており、その一部を紹介する。

感謝 尊敬 祈り

研修終えて帰国



迷い子になった話です。日本に来て最初の週に津島キャンパスの近くで同僚と夕食をとりました。初めて日本酒を飲み、少しだけ酔ってしまいました。「送りましょうか」と友人が気遣ってくれましたが、私は気分が高揚しており、「いやない」と言いつつ、自転車でも帰りました。真夜中、外は寒かったが、酒のお蔭で体は熱い。12月の岡山はネオンの光と共に平和に輝いていました。そのうちに山の麓まできており、道が判らなくなったことに気づき、通行人に英語で尋ねましたが、皆さん

は日本語で答えて、何も判りません。もう酔った勢いはありません。午前1時にもなっていました。10代の女性が自転車を通るのに会いました。英語で尋ねました。「岡山運動公園へ行く道を教えてください」。彼女は親切にそこまで自転車で案内してくれました。私は感謝のつもりでミャンマー製の小さな財布をあげました。最初は「要らない」と断られましたが、最後には私の気持ちを理解してくれて「ありがとう」と言いつつ受け取ってくれました。私は留学生会館に安全に帰りました。その夜は良く眠れました。

でも感謝しています。いつものように朝早く鹿田キャンパスの病院に行く途中、交差点の赤信号で待つっていると、男性がごみを拾っていました。掃除人ではありません。70歳ぐらい。単に道路を綺麗にしようとしていたのです。素晴らしい！私は尊敬の念を隠し切れませんでした。挨拶をして、私の感謝の気持ちとして翡翠のリングを差し上げました（これは皇帝翡翠ではなく、安価なものでした）。
———
大手術を受けた患者さんに、次の日集中治療室であったときです。彼は不安で、落ち着きがない。私は手を握り、見つめながら、回復することを心から祈りました。「もう一度、彼が家族と平和に生活できるように待っていてほしい。彼も私の手を強く握ってくれました。私はミャンマーからの小さな財布をあげました。白い象が描いてある。私は彼が今の困難を克服できるように力をあげたかったです。」
居合わせた看護師さんが「良いお付き合いになりましたね」と言ってくれました。嬉しいことに、彼はこの困難を乗り越え、家族の元に帰ることが出来ました。退院する前に彼は、ミャンマーを将来ぜひ訪れたいと言ってくれました。私も言いました。「温かく迎えますよ」

医師ら32人訪問

岡山大を中心に川崎医科大学、山口大、佐賀大、三重大、東京医科大学、それに韓国アジユ大の医師、看護師、学生ら計32人が1月5日から12日までミャンマーを訪問した。ヤンゴン総合病院とネビドー総合病院で形成外科、脊椎外科の手術を指導。ミャンマー医学研究大会のシンポジウムにも出席し、「日本の救急医療」「ミャンマーの乳がん検診」などについて発表した。岡山大学の氏家良人教授らのNPO「救命おかやま」が新ヤンゴン総合病院でAED（自動体外式除細動器）の使い方を指導し、1台を寄贈した。

協会だより

コラムを連載中
山陽新聞夕刊3面コラム「2日題」に、毎週火曜日、岡田茂理事長が原稿を書いている。4、5月の計9回。4月の題は「鉄コネクション」「親日のルーツ」など。ミャンマーとの関わり、岡山大学と協会の医療支援活動などを、エピソードを混じえて紹介している。5月は趣味や人生観にも触れる予定だ。
理事に笠井教授
新しい理事に笠井裕一・三重大学大学院教授（脊椎外科・医用工学）がこのほ

桜の季節、再び日本に



かつて岡山で研修したウミヤウイン医師が来日し、滞在先の群馬県から協会宛にこのような手紙が届いた。

私は今、ネビドー総合病院の核医学科部長になっていきます。岡山大学病院の放

射線科で4か月の研修を受けたのは3年前のことです。日本・ミャンマー医療人育成支援協会の援助により、岡山県からの奨学金を得ての留学でした。研修では放射線医学の勉強ばかりではなく日本語、日本文化を学ぶ機会がありました。私は桜の季節の群馬で再び日本の地を踏むことができ、とても嬉しく思います。今回はIAEA(国際原子力機関)と群馬県が主催

広報室から

もうこりた
天台宗の重要な教えの一つに「忘己利他(もうこりた)」があります。開祖の澄が「山家学生式」の中で「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」と記しており、自分のことは後にして、まず人が喜ぶことをする、それは仏さまの行いで、そこに幸せがあるという意味です。また「ジャカータ」という説話集に、こんな話があります。釈尊が森を歩いていて、子供を産んだばかりの雌虎に出会いました。雌虎は空腹のあまり生まれてばかりの我が子を食(く)ようとしていました。それを見た釈尊は自ら虎の餌になろうと近くの崖から飛び降り、虎の子どもをお救いになりました。この話は「忘己利他」の精神を最もよく示していると言われています。

命をかけてまで人を救うことは容易なことではなく、凡人にはできません。ただ私は、みんなが幸せになるのならば

分のことは少しぐらい我慢したついでに、いやなことを今まで暮らしてきた。NPOの活動に関わり私自身もミャンマーに診療所を寄付し、何人もの留学生のお世話をしました。多くの方々の支えでNPOの活動も順調ですし、ミャンマーは民主化が進んでいます。かの国の人たちは少しも幸せを感じてくれたでしょうか。私は貢献できたでしょうか。私も人生の集大成をする年齢になり、みんなが幸せになるためにやってきたことが間違っていないか。もうこりた「もうこりた」とつぶやきながら今一度顧みたいと思います。

りる老人に出会いました。老人の村は長年続く戦争のため田畑は荒れ果て、その上疫病が流行ってみんな飢え死にしかけていたのです。虎は自分の毛皮を売ってお金にするようにと言って毒草を食んで息絶えました。実はこの老人は釈尊の化身だったので。釈尊はこの虎の慈悲深さに感涙されました。またあるとき、もう片方の虎が森で貧しい身なりの老人に出会いました。この時、虎はたいそうお腹が減っていました。老人を見かけると、いつも母虎が教えてくれたように、釈尊に違いない、自分のために死んでくれるのだと確信しました。しかし老人は自分の村の話をして始め、一向に虎のために死んでくれる素振りがありません。空腹に耐え兼ねた虎はついにその老人に襲いかかり食べてしまいました。釈尊は同じ話を聞いて育つても、こんなに違うものなのかと虎の罪深さをお嘆きになったそうです。(福山支部長 西山央子)

編集後記

医師には趣味人が多い。異能の人も少なくない。前号の石川隆俊理事(東大名誉教授)のヴァイオリンに続いて、今回の榎野博史・岡大病院長の写真もそうです。序文に森田潔・岡大大学長が「医師の目、芸術家の目、人の心をもって…一瞬のチャンスをつかみ」と書いています。確かに、そんな一瞬に出会える写真集です▼言われてみればその通り。学生会員についての提言を

ど就任した。同教授は何度もミャンマーを訪問し、脊椎手術などの指導にあたっていた。2010年11月10日発行の「ミンガラバー19号」に首都ネビドーの総合病院での指導報告を載せている。
100万円寄付
去年10月に死去した故原野昭雄理事の恵子夫人から「ミャンマーの医療支援に役立つて欲しい」と協会に100万円が寄せられた。(西崎)